

しあわせ小箱

医療事故に負けるな * 1

きる。でも、その男性は「医療専門」をうたっていた。子宮が女性にしかないように、前立腺は男性にしかない。「そんな

昨年、全国で起きた医療事故は、少なくとも3882件。裁判に至ったのは878件に上る。患者側が病院側と争うには法的知識が必要だが、「医療」と「法曹」の距離はまだまだ遠い。

「前立腺がんの女性患者っていいんですかねえ」

医療事故を専門に扱う弁護士・石黒麻利子さん(55) (第二東京弁護士会)は10年ほど前、男性弁護士の一言に驚き、あきれ果てた。一般の人だったら理解で

患者の味方 闘う弁護士

「前立腺がんの女性患者っていいんですかねえ」

医療事故を専門に扱う弁護士・石黒麻利子さん(55) (第二東京弁護士会)は10年ほど前、男性弁護士の一言に驚き、あきれ果てた。一般の人だったら理解で

「前立腺がんの女性患者っていいんですかねえ」

医療事故を専門に扱う弁護士・石黒麻利子さん(55) (第二東京弁護士会)は10年ほど前、男性弁護士の一言に驚き、あきれ果てた。一般の人だったら理解で

しあわせ小箱

医療事故に負けるな * 2

を伝えると、封建的な父から一喝された。「女に教育はいらない。家に戻って結婚しろ」。仕送りと学費の支払

医療事故を専門に扱う弁護士・石黒麻利子さん(55)は、元脳科学者という異色の経歴を持つ。医療の道を目指したのも、弁護士になったのと同様、19歳の冬に母を亡くした経験だった。

死因は、くも膜下出血。3歳の時にも母は同じ病に倒れ、その後、入退院を繰り返していた。「脳科学を研究し、同じように苦しむ人を減らしたい」

当時、家を出て愛知県内の私立大学で衛生学を学んでいた。希望

母の死 脳科学の道へ

いをストックされた。それでも決意は揺るがなかった。医学部の教授秘書に雇ってもらい勉強を続けた。

大きな声では言えないが、土日も治療を手伝わされ、休みは一日もなし。学校で寝泊まりするうちに、料金滞納で電気もガスも止められてしまった。

午後10時頃に仕事を終えると、教授室のフロアにあったシャワーを浴び、自習室で勉強。その後、いすを並べて横になった。そんな生活は半年ほど続けた。

つらい試験に耐えていれば、思わぬ幸運が巡ってくるものだ。ある日、医学部に所属する大学院生の研究を手伝うことになった。将来の夫(61)との運命的な出会いだった。

しあわせ小箱

医療事故に負けるな * 3

医学の博士号を取得した1992年、民間研究機関で念願の脳科学者としてのキャリアをスタートさせ

元脳科学者の弁護士・石黒麻利子さん(55)は愛知県内の私立大学を卒業後、理化学研究所(埼玉県和光市)の研究助手をしながら大学院に通った。国内外から優れた研究者が集まる理研では、昼間から大学院生に研究用の機械を使わせる余裕はない。大学時代に続き、研究室のソファに寝泊まりしながら、夜中に機械を借りる日々。体を壊して1か月入院したこともあったが、その成果は2本の論文に結びついた。

研究の日々からまた挑戦へ

た。その後に移った国立の研究機関では、年間1億円の研究費が出る恵まれた環境だったが、周りは国立大学の出身者ばかり。名もない私大出身の自分を見る目は、どこか冷たく感じられた。でも、「人は人、自分は自分」と言い聞かせ、アルツハイマー病が発症する仕組みの研究に没頭した。研究者は、論文の執筆や学会での発表も求められる。何度も論文を書き直すうちに英語力が飛躍的に向上した。実は受験勉強は苦手だった。「厳しい環境で眠っていた能力が覚醒した」。国際学会で発表する機会も増え、実力が認められるようになった98年末。達成感とともに、新たな道へ挑戦する意欲が湧いてきた。

しあわせ小箱

医療事故に負けるな * 4

が、脳科学者流の勉強法だ。択一試験の「過去問」を解く際、回答を間違えたら教科書に立ち返りがちだが、その過程

「科学者の夢はかなえた。別の夢に挑戦したい」。元脳科学者の弁護士・石黒麻利子さん(55)は1998年の12月、37歳で国立の研究所を辞め、司法試験への挑戦を始めた。中央法学部を経て同大の法科大学院に入学。司法制度改革で2004年に創設された法科大学院の1期生として、法科大学院修了者が初めて受けた06年の「新司法試験」に一発合格した。効果を発揮したの

司法試験 脳科学流で

を省き、できるだけ多くの問題を繰り返し解いた。短期記憶を繰り返すことが長期記憶として効率よく脳に定着する。そんな脳科学の常識を応用したのだ。「勉強は根性じゃなくて効率です」。そう言っても、根性も半端じゃない。1日の平均勉強時間は16、17時間。あまりに机に向かい過ぎて脚の筋肉が落ち、試験が終わった頃には股関節痛で歩けなくなっていた。義父が医療事故に遭い、両親が動かなくなっただけでなく、義母も体調を崩し、週末は東京から愛知まで介護に通った。「医療事故は本人だけでなく、家族の生活も脅かすんです」。その後、医療専門の弁護士の道を歩みきっかけとなった。

しあわせ小箱

医療事故に負けるな * 5

本も出版する予定だ。そこには、「誰もが安心して医療を受けられるようにしたい」との思いがあ



文・山下真範

元脳科学者の弁護士・石黒麻利子さん(55)は2年前から、都内の私立大で看護を学ぶ学生たちに医療事故について教えている。「あなたたちは患者さんたちを簡単に死なせてしまうこともできる。だからこそ実情を知ってほしい」

「もうからない」初心忘れず

「もうからない」を指し、恩返ししたい。そこに書かれていたのは、弁護士になった時に語った「初心」だ。その思いは今も、そしてこれからも変わらない。

(了)

る。

弁護士になって12月で10年。弁護士事務所の机の引き出しには、2007年12月19日付の読売新聞の記事を大切に保管している。「社会生活で本当に困った時は普通の

人々に支えられてきた。『もうからない

弁護士』を目指し、恩返

ししたい。そこに書

かれていたのは、弁護

士になった時に語った

「初心」だ。その思い

は今も、そしてこれか

らも変わらない。